

元曉の真如觀

——起信論海東疏を中心として——

李 平 来

大乘は『起信論』の信仰の対象である。大乘の「大」は論の中に於いては体相用の三大を示しているし、「乗」は一心に譬えられたものである。従つて、大乘は一心そのものである。その一心が論の中には心真如と心生滅との二門に開かれて進んでいる。更に、「解釈分」の冒頭に「心真如者即是一法界、大總相法門体」といい、真如の自体を明らかにしている。諸法の体である真如は永遠不変であり、自性清浄であり、無量功德を具足している。ところが、体としての真如の存在は云何に証明するべきか。論の中には、それを離言と依言によつて証明している。しかし、元曉は真如が離言であるか、依言であるかと論議することは「自宗相違の過失」と「自語相違の過失」に墮すると破して、理は絶言にしてまた不絶言なりと和諍している。また、論の中に真如は即示摩訶衍といい、それ自体として存在するものと宣言している。

しかし、心生滅門に於いては一心が云何に作用するか。元曉は「此一心体有本覺」。而随無明動作生滅。故於此

門「如来之性隱而不顯名三如来藏」と心生滅門を定義している。また、『楞伽經』の中には、如来藏は「為無始虚偽惡習所三熏名為三藏識」という。阿梨耶識は、如来藏が無明に色づけられた結果である。それゆえに、この識を真妄和合識ともいうのである。真妄和合であるから、この識には本覺と不覺との活動があると考えられる。論の中には、これを生住異滅の四相、三細六麁、五意などで妄念分別がどのような因縁で起こり、どのような構造で活動するかを説明する一方、始覺、六染、熏習説を説いて心生滅門より心真如門に入る過程を述べている。この中、元曉の説相は生住異滅の四相と不覺・相似覺・随分覺・究竟覺の始覺と三細六麁とを巧みに組みあわせて説明しているところに特徴がうかがわれる。即ち、生相に三細を属せしめ、阿梨耶識の位の差別を行なう。無明が此の三相と和合して一心の体を動じて差別を現わすのである。住相は、六麁の中の智相にあてはめ、第七識の位の差別としている。元曉は、『勝鬘經』の「於此六識及心法智」此

七法刹那不住」という一節を引用して、心法智を以て第七識の存在を証明している。そして、この住相には生相の作用によりて我痴・我見・我愛・我慢の四煩惱が生じるのである。異相は、六塵の中の相続・執取・計名字相にあてはめ、以下は六識の位の差別にする。従つて、この生起識には六大煩惱が起るのである。滅相は、六塵の中の起業・業繫苦相を配属し、身・口二業が生じるのである。以上、生住異滅の四相は凡て根本無明の働きによつて生じるが、心の流転にすぎないと考えられる。諸法の源は一心だと思ふからである。一心の流転にたいして、元曉は「心の体は常住であり、心の相のみ生滅する」と、一心の体は無二絶対なることを貫いている。

さて、流転門にたいして、還滅門の立場から論じようと思ふ。始覺・六染・熏習説は還滅門に係させて説かれてゐる。還滅門は、修行の段階を示すものと考えればよいだろう。生住異滅の順に生じた妄念分別は、滅異住生の順に断ぜられるわけである。実践修行により滅相が始めになくなるが、これを始覺の階位では不覺といい、菩薩の十信にあたるというのである。『起信論』の三身説によれば、この段階では分別事識の活動より応身のみが見えるという。異相が消えさる段階を相似覺といい、三賢菩薩になる。三賢菩薩が三昧に入れば、自己の本性が真如であり、自性清浄なることを信

じるようになり、報身が見えはじめることになる。即ち、六識の分別心は断ぜられ、第七識の位に入るのである。住相の領域になり、四煩惱が生じるのである。絶えざる修行の結果、四煩惱が滅し随分覺になる。

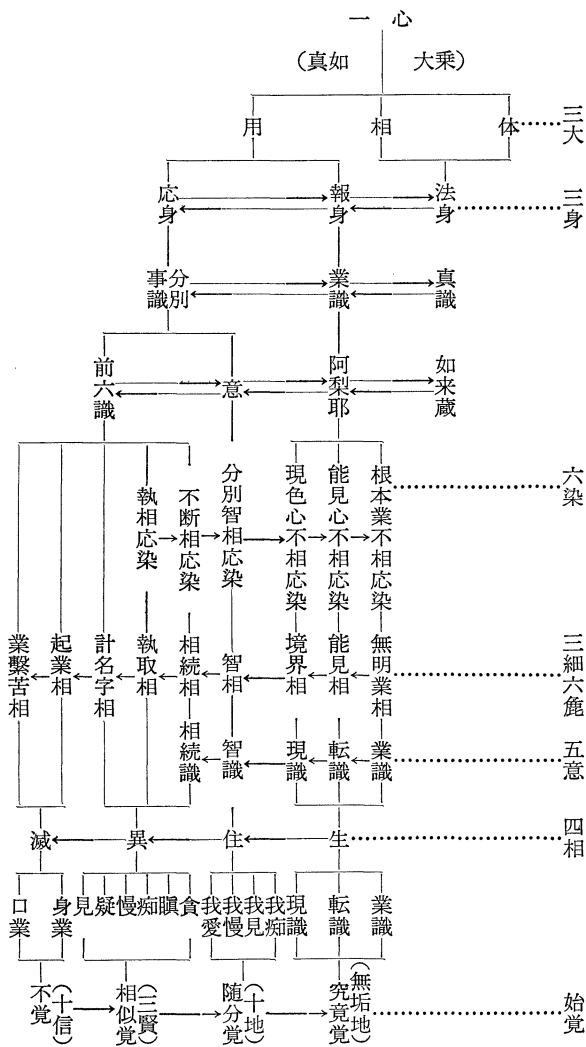
この階位を元曉は十地の位と見、報身になつたというのである。最後に、微細分別の業識がなくなり、究竟覺になるわけであるが、無垢地の法身になる。元曉は、究竟覺の位には動念が凡てなくなり、ただ一心のみが現われると述べている。是の如き始覺は本覺に異ならずという結論が自然に持ちだされるのである。元曉は、帰命三宝を解釈する時も三宝に帰命することは一心に還源することであると説明している。柏木弘雄博士は、『摂論』における真如は法の真如を強調したのにたいして、『起信論』は心の真如を重視していると指摘している。また、高崎直道博士は、『宝性論』における法身の一元論を述べているが、一心、真如、法身をいう『起信論』は元曉の解釈のように「一心の一元論」であると考えられる。従つて、両論の如来蔵思想の同質性を現わしていると考えられる。

心の真如には能生の義がないのにたいして、心の生滅にはそれがある。即ち、理体は絶相であり、もう一方では随縁である。真如自体には大智慧光明の義があるから絶相であり、心体は縁に随つて動じて妄念となるから随縁になる。従つ

元曉の真如觀（李）

て、元曉の『大乘起信論疏』にあらわれた真如觀は、心相には生滅・差別があるけれども、心体は無二絶体であるという結論となり、「一心一元論」が成立すると考えられる。いままで、論じたことを読者の理解を図るために図示すれば次の通りである。

- 1 仏教大系一八〇。
- 2 仏教大系一六四。



- 3 大正蔵十六一五〇中。
- 4 仏教大系一一六〇。
- 5 仏教大系一一九二。
- 6 仏教大系一二五。
- 7 相木弘雄「大乘起信論における法と義」（平川彰博士還暦記念論集 仏教における法の研究）。
- 8 高崎直道「法身の一元論—如来蔵思想の法観念」（平川彰博士還暦記念論集 仏教における法の研究）。

（駒沢大学大学院）